

あとがき　　く僕が「先生」になるまでく

僕が通信制高校の先生をしていたと言う話は、この本の中でも何度か話したと思う。僕はこの学校で「先生」という仕事を知った。どんな参考書に載っていない、「先生」の魅力と苦しみを知った。それが今も自分の心の中心にある。先生と言う職業を通じてLOVE OT HERSを実現しようとしている今も。

僕は先生になった。今では僕の事を先生と読んでくれる人がたくさんいる。でも、初めて会った人に「僕は先生です」というのはちよつと恥ずかしい（笑）だから僕の自己紹介も込めて、僕が先生になるまでの話をしよう。どうして僕は先生を志したのか、どういう先生になりたかったのか、そしてどうしこの「教育論」を書いたのかが分かるはずだ。

僕が勤めた通信制高校には、はじめを受けたり、犯罪を犯してしまったりして、高校を一度辞めてきた子が多く集まっていた。だからみんな一度は学校に絶望したり、大人に不信感を持っていた。もちろん彼らも世間から「特別視」されていた。でもそんな生徒達が「もう一度頑張ってみよう！」という想いで、この高校の門を叩いて集まった。それは並大抵の事

じゃない。僕が先生をやっていた時には20歳を過ぎて中学校のアルファベットから勉強し直す子もいた。若い子達に混じって高校卒業の資格を目指す42歳の生徒もいた。(他の校舎では70代の高校生もいたという話を聞いた) そんな彼らが勉強し、やがて社会に旅立っていく。それを最大限に応援するのがこの学校だった。

そんな学校に赴任した僕は新米教師として夢も理想もあつた。「毎日生徒と仲良く楽しもう」「卒業式には涙で別れるくらいの学校生活を送らせてあげよう」でも、そんな理想は赴任後1週間も経たないうちにもろくも崩れ去った(泣) この学校は想像していたものと何もかもが違ったんだ。

この学校には学年が無かった通信制なので必要な科目さえ取れば高校は卒業できる。だからそれを1年生でとつても3年生でとつてもいい。だからクラスは年齢ごとではなく、入学する時期に応じて先生ごとに割り振られた。

僕のクラス、中村組には下は十五歳から上は二十二歳の子まで、20人くらいが籍を置いた。この学校に入学する時期はない。学校を辞め、もう一度勉強したいと思つたその時が入学時期だ。だから毎月毎月、中村組には新しい生徒が入ってきた。高2の子、高3の子、中学を卒業したての子、高校に行つた事がない二十二歳の子、「生徒」と一括りにするにはあま

りにも違いすぎる子供が僕の前にいた。

僕は学生時代から塾や家庭教師で「先生」と呼ばれてきたから、この学校で先生をやるのも多少の自信があった。自慢じゃないけど大学4年生の頃は、塾の社員よりも多くの授業をこなしていた。バイトしていた塾から入社のお誘いももらった位だ。でも、そんな薄っぺらい自信はすぐに粉々に砕け散った（笑）

「だから何？別に勉強なんか教えてくれなくていいから、さっさと単位くれよ。こっちは卒業資格さえもらえればいいんだよ！」そんな空気がビリビリ漂う教室では僕の経験なんてこれっぽっちも役に立たなかった。僕のクラスの生徒は、家庭環境も、歩んできた経歴も、目指す夢も、全く違う。そんな生徒達に、僕は何をしてあげられるのか。何が出来るのか。毎日毎日必死で考え、考えても答えが出ないから思いついた事を行動してみる。そして失敗して反省し、またチャレンジする。そんな日々だった。（泣）

不登校も素行不良の生徒も、普通はクラスに一人いるかいなかだ。そんな生徒が、僕のクラスには何十人もいる。生徒の扱い方なんて、どんな教育書にも載っていない。載っていたとしても新人教師にできるはずはない。文字通り僕は格闘した。

僕が受け持った生徒の中には、100日間毎日家庭訪問に行った子もいる。その子は学校に行きたいんだけど行けなかった。支度をして、玄関に立つ所まではいけるんだけど、玄関のドアを開くことができない。その子は心療内科のお医者さんにもかかっていたから、彼女の不登校は単純に「学校にきなさい」と言っただけで済む問題ではなかった。その子は入学時の顔合わせで僕に「先生は今までの先生とは違うみたいだから、私も頑張つて学校に通う」と言った。僕はその声に、その想いに応えなかった。でも何の知識も無かった新米教師の僕にはどうすることもできない。「何でもいい。何かその子の力になつてあげたい。」だから僕は、何もできないけど、朝一番にその子の家に寄つて、話をしてから学校に出勤することにした。僕のホームルームだけは受けてほしかったから。

なんで100日間だったか。それは僕が生徒の家に行き始めてから101日目、その子が学校に来たからだ！

僕が朝、いつもの様にその子の家に行くと、
「うちの子、今日は学校に行きましたよ！先生、本当に本当にありがとうございました。」
と、お父さんが泣きながら喜んでいて。僕も急いで学校に行くと、中村組の女の子に混じつて彼女がいた。初めて来たのがウソのように、学校に溶け込んでいた。

「先生、私イキナリ友達出来ちゃった(笑)」

そう言つて彼女は、少しづつ学校に来れるようになっていった。そしてホームヘルパーの資格を取り、高校を卒業。今は結婚し、一児のママになっている。

このやり方が良かったかどうか分からない。今だったら同じ事はきつとしないだろう。(現場に言つて本人と話す、という姿勢は今も変わらないけど、100日間毎日という真似はしないと(思う))その後、僕は教育書を読みまくった。もつといい方法はないかと専門家の声にも耳を傾けた。そして教育カウンセラーの資格を取った。そんな経験を通して、今では自分の対応が取れるようになった。今も家庭教師では不登校の生徒を何人も受け持っている。学校に通えなくても自宅で僕と一緒に勉強し、次のステップからは学校に通えるようになった生徒が何人もいる。僕がこの生徒と出会つて学んだ一番大きなこと、それは「生徒のそばで応援し続ける事」だった。今もその姿勢は変わらない。

この頃の僕は二十四時間勤務中だった。

夜中に「先生、俺はもうダメだ。生きてる価値なんてねえよ」と電話がかかってくる。僕はその子がいる所までバイクで行つて、「そんなことねえよ！」って言つて、その子を家まで

送る。そんなことはしよつちゆうだった。だから携帯電話は常にONの状態でも出れるようにスタンバイしていた。

僕が一度だけ携帯のメールアドレスを変えた時、先輩の先生に言われたんだ。

「もし、先生の生徒が思いつめて自殺しようとしている時、最後に先生に相談しようと思つてメールを打つて『送信できません』という文字を見た時どう思うかな。僕はそれを君に強制はしないけど、そういう事があつても後悔しないなら（アドレスを）変えてもいいんだ。でも、先生はきつと後悔すると思うから。だから忠告しとくね。」

本当にそれが冗談とは言えない状況だった。（僕はそれ以降8年が経つが一度もアドレスを変えていない）

ある日の朝、学校に行くとき生徒から電話がかかってくる。

「先生、昨日自殺しようと思つて川に入つたら、お姉さんが助けてくれて。今その人んち泊まつてるんだけど、どうすればいいかな？」

すぐに迎えに行つて話を聞く。助けてくれたお姉さんにお礼を言つて、朝のマックで3時間話した。何を話したかは覚えていないけど、必死でどれだけその子が大事かを訴えていた事は覚えている。そして2人で泣きながら、「生きよう」と約束した。（そんな彼女もまた、今

は一児のお母さんになっている)

いじめも不登校もリストカットも、鑑別所や少年院にだって僕は驚かない。いや、正確に言うと、最初は驚いたけど、僕はいつもそんな現場の最前線に立ってきたから、驚く事なんて忘れてしまったんだ。その現場では驚いている暇なんて無かった。次々と予想もしない事が起こる。本当にニュースで聞いたような事が現実にかかるんだ。でも驚いていても仕方ないから、次の瞬間、「どうする？」と考え始める。そして動く。その繰り返しだった。

僕に何かの特別な能力や才能があるわけではない。だから僕はその子に自分が「何をしたいか、何ができるか」を真つ先に考えた。そして、僕は何もしてあげられないけどその子のいる所へ行った。そしてたくさん話をした。・・・それだけ。誰にでもできる、たったそれだけの事なのに生徒達は「先生がいてくれてよかった」と言ってくれた。僕は思った。

僕はこの子達に何か「してあげる」んじゃない。

僕がこの子達に何か「したい」からするんだ。

だから感謝するのはむしろ僕の方だ。生徒達がいたから僕は本気になれた。この子達じゃ

なければ僕は本気になれなかったかもしれない。僕は他の仕事を経験した事もあるけれど、どんなにお給料をもらっても、他の仕事では本気になれなかった。生活は出来たけど「生きて」はいなかった。道が違ったんだ。僕は生徒達と向き合う事で、自分の生きる道を見つけた。だからこそ、そこでもっともっと「学ぼう」としてきたんだ。

そうやって僕はこの仕事を、「先生」を自分の仕事に選んだ。
それからもずっと僕は学び続けた。

どうしたら学校を辞める生徒がいなくなるんだろう？

・・・学校を辞める理由を一つ一つ潰していけばいいじゃないか。まずは理由を調べよう。

どうして生徒達は学校を辞めてしまったんだろう？

・・・いじめ、不登校、犯罪による退学。勉強が分からなくて、ついていけなくなった子もいれば、御三家と言われる進学校で優等生を演じるのに疲れた子もいた。理由は様々、でもいじめや犯罪ならば、人としての愛情を教えればいい。勉強が原因なら、もっと勉強を面白く教えればいいじゃないか。本来学ぶべきものを学んでいないから問題が起る。それは「教

える側」、つまり親や先生の力不足にも原因があるんじゃないかと僕は考えた。

どうしていじめは起こるんだろう？

いじめの後はどうしたらその子の傷は癒されるんだろう？

・・・いじめが起こるのは親の躰（しつけ）、先生の指導が足りないせいだ。大人がちゃんと「それはいけない事だ！」と教えなければいけない。叱らなければならぬ。そして大人達が態度で示さなければならぬ。でもそれが出来ていないから、いじめはなくなるならぬ。

僕はこの学校ではいじめをなくすと言うよりも、いじめにあつた子の「心を取り戻す」事に全力を注いだ。（いじめを受けて学校を辞めて来た子が多かつたから、この学校でいじめをする子はほとんどいなかった）

いじめを受けた後、その子は人間不信に陥ってしまうから、関わる人みんなに恐怖心を持ち、誰とも心を開いて接することができなくなってしまう。その閉じた心を開けるのに必要なのは、「どうせ人間なんてみんな一緒だ」と言う考えを超える位の仲間を築いて、「人間で、中にはいいヤツもいるんだな」と本気で感じる事だ。僕はそう考えた。

僕の中村組ではいじめは絶対に許さなかつた。それどころか我がクラスは、年齢は離れて

いても、歩んできた経歴が違って、みんなが「仲間」だった。みんな何かしらの傷を抱えて「再挑戦」しようとしている。道は違えど、お互いを尊重し合う同志だ。そんな意識が誰の中にもあった。ヤンキー上がりの18歳と偏差値63の女子高生がクラスメイトとして仲間になる、そんな学校だった。(きっと本当はそれが普通なのに、普通に感じなくなってしまうほど、世の中には変な偏見がありすぎる)

そんな生徒達の上に立つ僕は、生徒達の模範となるよう勤めた。僕は生徒達に「人の愛情」を教えたかった。仲間の素晴らしさを教えたかった。

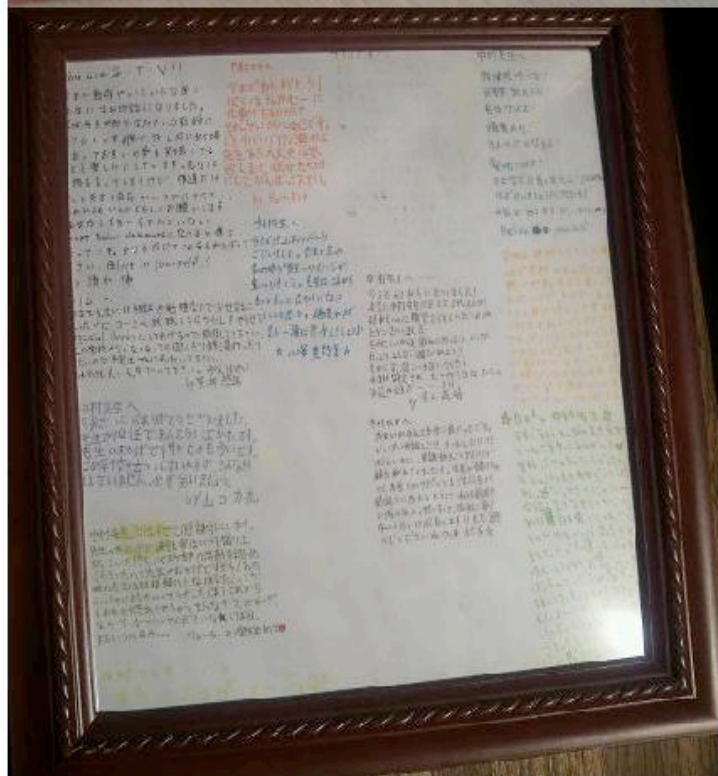
だから職員会議で生徒の誕生日に何かプレゼントを買ってあげよう(予算100円)と決まった時、僕は迷わず「色紙」を買ったんだ。そしてクラスのみんなで寄せ書きをして渡した。他のクラスでは筆記用具や100円ショップで買ったプレゼントから選ぶようにしていたけど、中村組の考え方はそんなじゃなかった。

「お金のこもったプレゼントより、気持ちのこもったプレゼントを贈ろう。」

「誰かの想いを受け止める喜びを経験しよう。」

「そしてそれを他の人にも伝えよう。」

そう僕は生徒達に教えた。自分が率先してそれを行う事で、想いが生徒達にも通じた。生徒



生徒達の熱い
想いがこもった
ハチマキ(上)と、
僕が学校を「卒業」
する時にもら
った色紙(下)。
まっすぐに向き
合えば、まっすぐ
な気持ちが還っ
てくる。生徒達が
教えてくれた。
僕はこの宝物を
見るたびに胸が
熱くなる。

達もそれに応えてくれたんだ。

僕にとつて忘れられない出来事がある。

ある日の午後最初の授業だった。僕が教室に行くと、そこには誰もいなかった。「あいつらめ。今日はみんなサボりか？」と思つていたら、ある子が僕を呼びに来た。

「おい！授業はどうした？」と半分キレていた僕を、「いいからいいから」と生徒は強引に引っ張つて、空き教室に連れて行つた。

カーテンを閉め、明かりを消した薄暗い部屋の中、うつすらと何人もの人影が見える。

・・・そして電気が付く。目の前にはケーキがあつた。真っ白な生クリームの上にチョコレートで文字が書いてある。

「HAPPY BIRTHDAY 中村先生」

僕の視界が曇つてくる。「イエーイ」「泣いちゃいますかあ？」という歓声上がる中、僕は「泣かねえぞ、泣かねえぞ」と頑張つていたが、「ありがとう」と言つた瞬間に涙が止まらなかつた。それを見て笑つている生徒達。「これ私が作つたんだよ」「これは俺がやつたんだぞ」と口々に言う、本当に可愛いクソガキ達。(笑)

「お前が生まれてきた事には意味があるんだぜ」そう、僕がいつも言つていた事を、この子

達に教えてもらった。人にはそう言ってきたが、本当に僕も生まれてきてよかつたと、この時は体で感じた。一生忘れる事のできない、本当に最高の誕生日だった。

他にも僕は生徒とたくさんの経験をした。金髪ヤンキーを引き連れて富士山に登ったり、一晩で山手線一周分の距離を歩くというサマーナイトウォークに参加して、一晩中生徒と歩き続けたり、「先生、風呂行こうぜ」と言われ、学校帰りに一緒に銭湯に行ったり、海に行ったりもした。その一つ一つに「思い出」があり、そこから僕は多くの事を学んだ。学校の勉強だけでなく、体験から色んな勉強をしてきたんだ。そんな大切な一日一日は先生である僕自身にとっても貴重な勉強の時間だった。

僕はこの学校で生徒達に育てられた。色々と驚く事はあつたけど、僕自身「人間で捨てたもんじゃないな」と本気で思えるようになった。どんなに世間から偏見の目を持たれていても、生徒は生徒だ。彼らは心の中で「今に見てろ」と言う炎を燃やしている。よい指導者に会えば、きっとその炎を正しい方向に向ける事ができるんだ。だから僕は、もっとこいつらに何かしてあげたい、何か出来ることはないかと思うようになった。そしてこんな問題について考え始めたんだ。

どうしたら生徒達は自立できるだろう？

どうしたら生徒達は自分の足で生きていけるんだろう？

・・・これが大きな問題だった。どんなに僕が熱く「生きよう！」と言って、その子が「頑張ろう」と思っても、その「やり方」がわからなければどうしようもない。僕が生徒の話を聞いて、カウンセリングして、生きる希望を持たせて、夢を持たせて、やっと生徒がスタート地点に立ったとしても、彼らに未来を切り開く方法を教えてあげなければ、生徒達は潰れてしまう。

頑張ると言って授業を受け始めた子が、数週間で授業に出なくなる。

「だって俺馬鹿だから、全然授業の意味がわかんねえし。やっぱ無理だよ」と言ってる。

一生懸命受験勉強を頑張ってる合格した子が、入学後まもなく学校を辞めてしまう。

「なんか、めんどくさくなっちゃって」と言ってる。

安易に犯罪に走ってしまう子もいる。

「勉強とか意味あんすかあ？それよか今を楽しまなきゃダメっしょ」と言ってる。

僕は先生として一体彼らに何を示す事ができるだろう。しばらく考えた末に僕が見つけた一つの答えが「勉強するという事を教える」事だった。

生徒達が社会で活躍するためには、まずはその基礎となる勉強をちゃんと教えなければならぬ。学校では「授業」を行い、「どうしてそうなるのか？」を教えようとしている。でも、それだけじゃ受験には合格できないから、生徒達は真剣に取り組まない。一方、塾や家庭教師という教育産業の人間達は「指導」を行い「受験に合格させる」ための勉強をしている。でも、受験のために暗記する勉強では受験が終われば忘れてしまうので、将来の役に立たない。だから生徒達混乱する。いい子になって暗記に取り組むか。勉強するのをやめて悪い子と呼ばれるか。そのどちらかの道しかなくなってしまうている。

だったら、両方やってみたらいいんじゃない？（笑）僕が出したのは単純な答えだった。でも、その単純な答えに挑戦すべく、僕は昼間は高校の先生をしながら、夜は家庭教師、予備校で教え始めた。朝から晩まで、目が回るくらい忙しかったけれど、でも、僕の中で一つの道が見えた。

学校の先生は塾の勉強についてこう言う。

「そんな受験のテクニックばかり教えたって、将来何の役にも立たない。」
確かにそうだ。でも入試に受からなければ、やりたい事ができないという現実もある。だったら単なる点数稼ぎの勉強じゃなく本当の勉強をさせて、それで受験も突破できたらいいん

じゃないか。先生がそういう勉強を教えていけばいいんじゃないか。僕はそう思った。

逆に塾の講師は言う。

「受験にさえ受ければ、道は開ける。学校なんか行かなくても勉強はできる。」

そんなことはない。受験と言うのは、受かったらその学校で「勉強する」ための試験だ。その学校でさらに深い勉強をしたいから受験をするんだ。ただ合格だけを目指して受験をし、仮に合格したとしても、入った後に辞めてしまったら意味がないだろう。テストには出なくても、知っておかなければいけないこともあるんじゃないか。

僕は学校と塾・家庭教師の両方を経験する事によって、両者に足りないものを補っていく事を考えた。要するに、受験でも使えて、意味も理解している「本質の」勉強をすればよかったんだ。

僕は教員免許を取るために、大学で「教科指導法」とか「カウンセリング理論」とか「教育原論」とか「先生」になるための勉強をたくさんした。だから現場で生徒に教えるときには、その知識が活かされている。でも、塾や家庭教師には教員免許を持っていない人が大勢いる。彼らは点の取り方は教えてくれるけど、生徒を育ててはいない。だから大学生でもアルバイトでやれてしまう。生徒に勉強を教えるなら、塾だろうが家庭教師だろうが教員免許

は取った方がいい。資格が必要と言うのではなく、「生徒の事を考える」勉強をしたほうがいいと思うからだ。

でも、教員免許を持っている人がみんないい先生だとも思わない。学校の先生には毎年生徒が「用意」される。どんなに授業が分かりにくくても、どんなに生徒の事を考えていなくても、毎年生徒は用意されるんだ。クラスでいじめがあっても、ニュースに出なければ先生を続けられるし、何年も先生にあるまじき行為をしても明るみに出なければ先生を続けられる。そういう世界だ。そんな世界だから、「先生」であり続ける努力をしなければ、すぐに悪い先生に堕ちていってしまう。

逆に塾や家庭教師として先生をやるうと思えば、実力がなければ続けることはできない。生徒は用意されるものではないからだ。授業がつまらなければ生徒はいなくなるし、生徒の事を考えなければ仕事は来なくなる。僕は18歳のときからずっと塾や家庭教師で先生をやってきた。だから毎日入試問題を解いてきたし、どうすれば点数が取れるかという事も分かっている。それを教えて、有名大学や有名中高に受かった子もたくさんいる。学校の先生がしてあげられなかったその子の夢のための勉強を僕は教えてきた。

ある生徒が言った。

「どうせ学校の先生に聞いても分からないし。塾で聞いた方が分かるから。」

学校の先生も、クラスで余裕ぶっこいていられなくなってきた (笑)

学校の先生もそういう「プロ」意識を持って、生徒にぶつかっていくべきだ。同様に塾や家庭教師の先生も、講師ではなく「先生」としての責任を持つべきだ。それがきつと一番生徒のためにとつて、いい事なんだ。僕はそう考えた。

僕は勤めていた高校を辞めた。僕が理想の教育を行うためには、もっともつと広い世界を知って、もつともつと色々な事を教えてあげなければいけないと思ったから。

僕はもう一度、もう二度、大学に通った。(笑)僕は今まで法学部、教育学部、文学部英文学科、経済学部、本当に色々な所で色々な事を勉強した。でもまだ足りないと思っている。

僕はずつと、文系と呼ばれる国語や社会の科目を中心に勉強してきた。一応そっち方面では自信を持って何でも教えられれると思っていたら、ある小学生が僕に聞いた。

「先生、この問題教えて。」

それは中学入試の算数の問題だった。僕は中学受験をしていないから「つるかめ算」とか「流水算」といった、入試独特の計算方法は知らなかった。だから僕はこう応えた。

「ごめん、俺は文系だからそれは分からないよ。国語とか社会だったら教えられるけど。」
するとその子は言った。

「えー、だって先生は先生じゃん。そんなのおかしいよ。教えてよ。」

僕はすごくショックだった。小学生の純粋な一言は、確かに的を射ていた。僕は、まだまだ自分には足りない部分があると痛感した。

そしてその日から、もう一度小学校の算数や理科を学び直したんだ。その子に一週間だけ時間をもらって、その子の使ってたテキストを借りて。

1週間後僕はその子に言った。

「もう大丈夫。何でも聞いてみな。この本に書いてあることなら全部教えられるから。」

その子は意地悪な質問を毎回用意して僕を苦しめたが、僕も必死に食らいついた(笑)でも、これが実はすごくいい結果を生んだ。生徒は毎回難しい問題を用意するために「予習」をするようになったから、生徒の成績はぐんぐん上がったんだ。

10年ぶりにやった数学や理科の世界は、新鮮でめちゃくちゃ面白かった。こんな感覚は久しぶりだった。僕は教える事に慣れてしまった自分を反省した。そして再び「学ぶ楽しさ」を意識するようになったんだ。

それからは小学生でも中学生でも高校生でも、文系でも理系でも何でも教えられるように勉強をしまくった。(うちには小中高大全教科の参考書が揃っているよ)仕事をしながらも勉強した。結婚して家庭を持つてからは、家の事をしながらも勉強した。正直どれも「金にならない」仕事だった(泣)。普通に専門とする教科の授業さえしていれば、一生生きていけたのかもしれない。でも僕にはそれができなかった。

僕は高校を辞める時に、生徒達と約束したんだ。

「いつか、お前らのような生徒がいなくなるように、俺はもともと頑張るから。もともと色んな事を身につけて、お前らが受けた悲しみや苦しみを、お前らの後輩には受けさせないようにするから。」

僕はそう言って生徒達と別れてきた。だから僕は先生の道の上で止まる事はできないんだ。この世の中には、いじめに苦しんでいる人がいる。貧困で犯罪に走る人がいる。生きる意味が見つけられないで、絶望し、死んでしまう人がいる。僕はまだまだそんな人達に対して、何もできてはいない。

だから僕はもつともつと多くの生徒と出会い、世界を舞台に活躍できる人材を育てていきたいんだ。僕一人の力では限界がある。それだけ大きなLOVE OTHERSをやるうと

思ったら、一人じゃ心細い（笑）だから、まだ若い芽を育てているんだ。いつか一緒に世界を動かしていく、その「仲間」を作るために。

そのために今、僕は仕事をしている。それはもはや、給料を稼ぐだけの仕事ではないのかもしれない。僕にとって「仕事」とは、生きる事そのものなんだ。だからその形には全くこだわらない。よく「どこの学校で先生をなさっているんですか？」と聞かれるけど、僕にとっては、どこの学校で教えているかとか、どこの塾で教えているかというのは全然問題ではない。そこに待っている生徒がいて、教えるべき授業があるなら、僕は飛んでいくよ。だから僕はこう答えるようにしている。

「僕は、なかよし学園の先生です。」

「え？それどこにあるんですか？」

「僕と生徒の心の中にあります。」

そんな学校を作りたい。偏差値がいくつとか、ここを出ると何かに有利だとか、そんなことに関わらず、生徒達がLOVE OTHERSのために一生懸命世の中を学び、羽ばたいていける、そんな場所をつくりたい。それが僕と相方で作るなかよし学園という学校だ。

僕は今、なかよし学園の校長として先生の道をさらにもう一步前へ踏み出そうとしている。

もしかしたら近い将来、今この本を読んでいる君と一緒に活動する日が来るかもしれない。
だからこの本の一語一語に熱い魂を込めた。

いつか立ち上がろう。世界中の苦しむ人に手を差し伸べるために。この世をおもしろくするために。この人生を熱く駆け抜けるために。

「LOVE OTHERS for yourself」

2010年8月2日

中村 雄一

著者紹介



中村雄一（なかむら ゆういち）

1978年東京都豊島区生まれ。小さい頃から勉強が好きで、中央大学法学部、早稲田大学教育学部、日本大学文理学部(英文科)・経済学部で学ぶ。通信制高校教諭、駿台講師、家庭教師のトライプロ講師を経て、なかよし学園を創設。同校校長に就任する。「Love others」を実現する教育を目指し活動中。